

月刊

2011

4
月号

みんぱく

特集

聞こえてくるもの 耳よりの話

聴覚の情報論 久保正敏

「耳ふさぎ」と「忘れられない話」 常光 徹

レコードと「純正な日本語」 渡辺 裕

「広島へタバコ買いに……」 近藤 雅樹

声明の伝承と変容 澤田 篤子

もし、神さまと出会ったら 小長谷 有紀

鳥の声は神の声 卜田 隆嗣

コーランの伝承とメディアの変化 西尾 哲夫

私がデザインにかかわる初頭、幾つかの触発される出来事に出会った。そのひとつが九鬼周造著『いきの構造』との出会いであった。購入したのは、まだ高校生だった。その後大学時代、PR誌『エナジー』の仕事でその著作に接したことなど、幾度か目にするようになる。そこには「いき」の哲学的考察が直方体を使って解説されたひとつの図形が記載されていた。

もうひとつの出来事、梅棹さんの思考を知るきっかけも、この『エナジー』誌からで、六〇年代はじめ『文明の生態史観』に出てくる「ユーラシア大陸の模式図」だった。著書のなかで「歴史というのは方法的に限定されている。文献がないところは存在しないということが建前になっている。しかしそれでは解けないことがいっぱいある。そのひとつが歴史的ゲシュタルトの構築、つまり構図設定である」と言われた。事柄の概略図あるいは原理図は、我々が考えるダイヤグラムの領域を超えるもので、私に大きな示唆を与えた。

梅棹さんと直に接するようになったのは、民博準備室が文部省にでき、通われていたころだ。打合せの後、青山の自宅に来てもらったこともある。現在ファッショントデザイナーとして活躍している息子が生まれたばかり。その赤ん坊を抱いて、ご自身の息子さんと重ね合わせながらあやしていたことも思い

プロフィール
1931年東京生まれ。グラフィックデザイナー。みんなく開館時より、シンボルマークをはじめ、展示企画特別委員会委員として数多くのグラフィックデザインに関わり、万博のADなども手がける。フルブックデザインビエンナーレ金賞、芸術選奨文部大臣賞など受賞多数。また、その作品はニューヨーク近代美術館やチューリッヒ造形美術館などに収蔵されている。
武蔵野美術大学名誉教授。



梅棹忠夫のデザインポリシー

勝井三雄

出深く、その息子ももう三七才。

みんなくのシンボルマークをデザインしているときは、いくつ案を出しても「もうちょっと」で「うん」と言ってもえなかった。「七大陸・文明圏」というイメージはあるが、具体的に表現に落とす難しさがあった。話をしているうちに、地球の連帯と活動をあらわしたと思うようになってきた。色は、海洋や天体を意味するものとして、はじめから青群から選ぶことを決めていた。

同時に、「友の会」のマークを制作した。外側の七つの大陸が移動するダイナミックな形、内側に形を閉じ込めるようなトポロジ的な表現をすることで、友の会がみんなくを外側から囲っていくようなイメージになった。

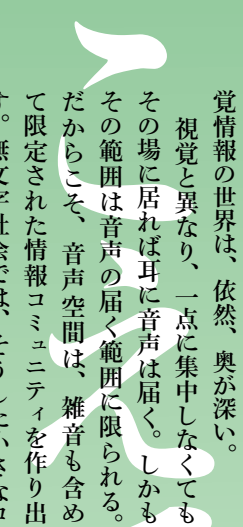
とにかく梅棹さんは、デザインに対するこだわりをもっていた。名刺に使う書体でさえ容赦しなかった。それぞれの文字が旨くハーモニーするかなど、細かく要求する。「名刺は人の顔だ。名刺からはその人の品格がわかる」と、非常にこだわった。梅棹さんは、デザイナーに匹敵する感性をもち、デザインポリシーに対する夢をもっておられた。当時そうした資質をもつ起業家でさえ少なかった時代であった。

大抵は「あなたにまかすよ」と言われることが多かった。僕はそうした梅棹さんに触発され、信頼されたことに誇りをもっている。

月刊
みんなく
4月号目次

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1 | エッセイ 千字文
梅棹忠夫のデザインポリシー 勝井 三雄 | 12 | みんなく Information |
| 2 | 特集 聞こえてくるもの 耳よりの話
聴覚の情報論 久保 正敏 | 14 | 地球ミュージアム紀行
大エジプト博物館保存修復センター
日高 真吾 |
| 3 | 「耳ふさぎ」と「忘れられない話」 常光 徹 | 15 | みんなく 私の逸品
復活祭装飾用卵
新免 光比呂 |
| 4 | レコードと「純正な日本語」
バスガイドの語る《別府温泉地獄めぐり》は何をもたらしただのか 渡辺 裕 | 16 | 散策と思索の径
台湾で、ラフ人をたずねて
西本 陽一 |
| 5 | 「広島へタバコ買いに……」 近藤 雅樹 | 18 | 多文化をささえる人びと
外国人のための専門家相談会
東京外国人支援ネットワーク
杉澤 経子 |
| 6 | 声明の伝承と変容 澤田 篤子 | 20 | 歳時世相篇
アマゾン川上流の聖週間
齋藤 晃 |
| 7 | もし、神さまと出会ったら 小長谷 有紀 | 22 | フィールドで考える
まずは心と身体を解きほぐす
上羽 陽子 |
| 8 | 鳥の声は神の声
——ボルネオ島ブナンの「聞きなし」から 卜田 隆嗣 | 24 | 次号予告・編集後記 |
| 9 | コーランの伝承とメディアの変化 西尾 哲夫 | | |
| 10 | 研究フォーラム
果敢に挑戦——みんなく若手研究者奨励セミナー
信田 敏宏 | | |

聞



るもの

耳よりの話

久保正敏 民博文化資源研究センター

「長目飛耳」ということばがある。観察力や情報の収集力があり、物事に通じていることを指し、さらに転じて見聞を広める書物を指す。かように、人間の情報収集における視覚と聴覚の役割は大きい。特に視覚については、ヒトの感覚細胞の総数の八割を視細胞が占め、情報入力の主役とされるため、写真や映画が発明された「視覚の一九世紀」以降、情報論やメディア論の多くは、視覚に注目したものであった。しかるに、文脈から切り離されて一点に集中できる視覚情報に比べて、その場と一体化し身体感覚と連動する聴覚情報の世界は、依然、奥が深い。

視覚と異なり、一点に集中しなくてもその場に居れば耳に音声は届く。しかもその範囲は音声の届く範囲に限られる。だからこそ、音声空間は、雑音も含めて限定された情報コミュニティを作り出す。無文字社会では、そうした小さなコミュニティでさまざまな口承文芸が生まれ、次々と伝承される過程で地域文化を取り込みながら変容していく。感覚器官を総動員し文脈から離れない点で、無文字社会の村落コミュニティがコミュニティシヨンの原点であり理想型だと考えたのは、マクルーハンだった。

他方、音声は目に見えないゆえに、目に見えない超自然の世界とつながる。「言霊信仰」がいうように、一旦空中に発せられた声は、消し去ることができない自立した魔力の世界を作り出す。それか

聴覚の情報論

ら逃れるには耳をふさげばよいし、耳に入った怪しい話は忘れるに限るが、忘れられないときにはどうしよう。そんな心理の機微に乗じてうわさ話が生まれ伝承されることもあるという。また、言霊が生まれぬように別の表現にいい換える文化もある。一旦声に出してしまうと、それはもはや自分だけのものではなくるといふ感覚も、音声を超自然の世界とつながっているからだろうか。目に見えない声はまた、目に見えない宗教的存在とのコミュニケーション手段でもある。仏典を唱える声明、鳥の声を神の声として「聞きなす」のも、その具体例だろう。いずれの場合でも、音声を表現し記録し伝承することは容易ではない。人は音を音響としてではなく、それぞれ文化における音素として聞くわけだから、聞き方の文化は後天的に、そしてある権威により形式化されていくのだろう。しかし、一九世紀以降の蓄音機や電話の発明など、さまざまな蓄積メディアや伝送メディアの発明は、その場限り、そのとき限りの音声の世界を、何度でも再生可能で伝送可能なものに変えた。音声による伝承のかたちは、それによって変わっていくかも知れないし、それでもなお変わらない頑固さをもっているかも知れない。

こうした聞こえてくる音声の世界の広がり、あらためて耳を澄ませてみよう。

「耳ふさぎ」と「忘れられない話」

常光徹 国立歴史民俗博物館教授

聞かなかったこと

見たくないものからは目をそらせればよいが、嫌な話だからといって耳をそらしたところで意味がない。聞きたくなければ両手で耳をふさぐのが手っ取り早い。「耳よりの話」の特集号にはふさわしくない話題で恐縮だが、凶報に接したときそれを聞かなかったこととする習俗が各地に伝承されてきた。「耳ふさぎ」とよばれる呪いである。最近は見かけなくなったが、以前は広い地域でおこなわれていた。死者と同年の者が、餅や鍋蓋、ときには草履を耳にあてて「わるいこと聞くな、いいこと聞け」などと唱える。死の世界に引き込まれないように、つまり、死者の影響を断つための呪法らしい。井之口章次は『日本の葬式』（早川書房）で、こうした行為は靈魂の動揺をおさえずめる心持であろうと説き、耳をふさいだ餅を川に流したり四辻に捨てるのは、餅を形代として、身につけているかも知れぬ忌を自分たちの生活圏から外に送り出そうとするのだと解釈している。

じんじんと鳴る

興味深いのは、耳ふさぎをするのが同い年の者に限られる点で、同齡感覚とでもいうべき独特の心意がはたらいっていることがわかる。

和歌山県川添村（現、白浜町）では、耳の奥がじんじんと鳴るのを耳鐘と称し、同じ歳の者が死ぬ前兆だとい

って気味悪がったという。ただし、同年齢であってもその影響がおよぶのはおおそ「屋根棟の見える範囲」とされている。今日では希薄になった心意だが、ある限られた範囲で生活をする同年齢者のあいだには通常の付き合いを超えた精神的な影響関係が作用していた。とりわけ深刻な事態は死の報に接することで、同齡者の不幸が耳に入ると自らの魂まで危うくなるとのつよい不安を抱いていたのである。

知ってしまったら

不吉な話題はいつときもはやく忘れたい。話は変わるが、何年前に『紫の鏡』ということばを二〇歳まで覚えていたと死ぬといううわさが流行ったことがある。二〇歳を過ぎた人間には縁のない話だが、小学校の高学年から中学生あたりがこのうわさに敏感に反応したようだ。「耳ふさぎ」の呪いは、本当は同齡者の死を聞き知っているのに（聞かなかったこと）にするためだが、「紫の鏡」は知ってしまったこと自体の不安をとりたて

ている。裏返せば、助かる方法は記憶を消し去るしかない。しかし、忘れようと意識すればするほどかえって頭の片隅にこびりついて忘れられなくなるのが人の常で、この種のうわさは、そうした心理に巧みに忍びこんで感染していく。難を逃れるために「忘れる」というのは至難の業だが、そこはうまくしたもので、「白い水晶玉」とか「助けてホワイトパワー」と唱えれば「紫の鏡」の呪縛から解放されるそう。ことばの意味は不明だが、うわさが流通していく過程で子どもたちがつくり出したおまじないであろう。



レコードと「純正な日本語」

バスガイドの語る《別府温泉地獄めぐり》は何をもたらしたのか

渡辺裕 東京大学大学院教授

山ほど出てくる

戦前のSPレコードを調べているというくらい驚かされる。バスガイドの語りをおさめたレコードが山ほど出てくることもそのひとつだ。特に、バスガイドの元祖ともいわれる《別府温泉地獄めぐり》は、一九三〇年代にビクター、ポリドールなど数社競作で出ている。単なる土産品ではなく、普通のレコードとして全国発売されていたようなのだが、別府に行ったこともない人は、このレコードを買っていったい何を聴いたのだろうか。

レコードというと、音楽を忠実に記録、再現するメディアとして発展してきたと思ってしまうが、最近のメディア史研究は、それが後づけのストーリーであり、実際にはもっと多様な展開を示してきたことを明らかにした。

熱い期待

特に興味深いのは初期のレコードで、方言の矯正や正しい発音の習得のための規範を提供する機能が重視されていた。レコードの溝はそもそも、振動波形をそのまま刻み込むものだったから、自分の発音を録音し、その波

形を模範的な発音のレコードに近づけてゆけば正しい発音が習得できるという理屈になる。実際、この技術の初期の段階では、音を再現せず、波形を記録するだけの装置すらあった。そこからは、進化論の隆盛などとも呼応しつつ、普遍的かつ合理的な言語や文化を求める時代の空気と、そのための恰好のメディアとしてのレコードに注がれていた熱い期待の一端が窺えよう。

名調子もたらす

バスガイドのレコードの話とどうかかわるのか、訝る向きもあるが、「地獄めぐり」の語りも「正しい日本語」のお手本という側面をもっていた。「地獄めぐり」バスを運行していた亀の井バスが作った冊子には、ガイドの語りの全文とともに、乗車した客が帰宅後に寄せたお礼や感想なども収録されているが、そこには、ガイドの語りが夢のような時間を提供してくれた、といった感想に混じって、「酔はされた純正な言葉」という教育関係者の投書が載っている。ガイドの日本語は「眼を閉じて聞くと、名文を最も相應しいスタイルで読むのであるやう」な純正な標準語であり、

ことにもなる。

その後のレコードは音楽の大量消費のためのメディアに特化されてゆくが、日本の近代化過程において、レコードが国民の標準化や文化の合理化に果たした役割を軽視してはならない。音楽消費のメディアとなった今も残るそのような「遺伝子」を注意深く探し出し、その系譜を見直してみることは、われわれの文化の別の一面を照らし出してくれるだろう。

「広島へタバコ買いに……」

近藤雅樹 民博 民族文化研究部

夜更けの図書室で

閉館後の書庫に入った。もう誰もいないと思っていたのだが、そんなことはなかった。ある場所を行き来しては戻るスリッパの音。耳を澄ませば、ページを繰るような乾いた音も、かすかにだが聞える気がした。

民博で、調べモノを始めようと思ったときには、たいてい夜になってる。その夜、わたしが見たかったのは、幽霊ではなくて、柳田國男の「広島へ煙草買いに」と題する一文だった。以下、柳田が『民間伝承』第二巻七号に寄せた記事から若干の事例を引く。

「ヒロシマへユクという言葉、彦岐では死ぬの隠語に代用して居る(略) 広島へ煙草買いに行くといふのは、伊予の内海側では死ぬといふ代りに、折々使はれる気の利いた忌詞になって居る(略) 或はそれを又大阪へ綿買いにと謂う」

耳について離れない

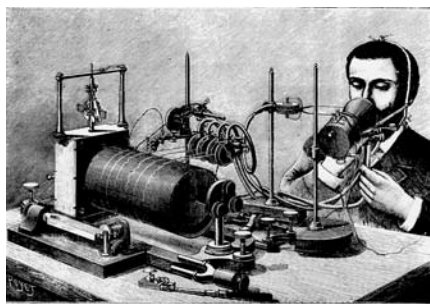
一九八五年に岡山で開催された日本民俗学会年会の公開講演で千葉徳爾が「ヒロシマに行く話—ムラびとの広域志向性—」と題し、この柳田の一文も披露した。意外に注目されなかったようだが、わたしには、何かわからないけれども、タイトルの語韻が耳についていて離れない。タバコも綿も、庶民層に普及するのは近世以降。しかし、柳田は「煙草といふのが近世式に聞えるが、私はなほ古い幽かな聯想が、暗々裏にこの文句の流布を支持して居るやうに感ずる」と、彼一流の直観を披瀝している。その後、タバコや綿ではなく「米を買いに」とか、新潟県では「長岡へ鹽買いにやる」。愛媛県では「別府の湯に行く」などと、いくつもの忌こばが採録されてきた。

「ヒロシマへ行く」という表現は、神域である宮島での埋葬を忌み、対岸に墓地を設けたことと無縁ではないだろう。すると、気になるのが宮島産杓子材料の出所。日本三景の国立公園で、世界文化遺産にも登録された宮島では、昭和三〇年以来、神木の伐採は一切「法度」なのだ。だから、その「宮島にヘラ木を遣る」ことは、蘇り(黄泉がえり)になるのかな?

ガイドの語りをおさめたレコードのレーベル



ポリドール テイチク ビクター



フランスの言語学者ジャン=ピエール・ルースロ(1846-1924)が1895年に考案した音声記録装置 Leonard De Vries, Victorian Inventions, London: John Murray Publishers, 1992, p.181



乗客のために亀の井バスが制作した地獄めぐりの小冊子

別府温泉地獄めぐりのパンフレットいろいろ



声明の伝承と変容

澤田篤子 洗足学園音楽大学教授

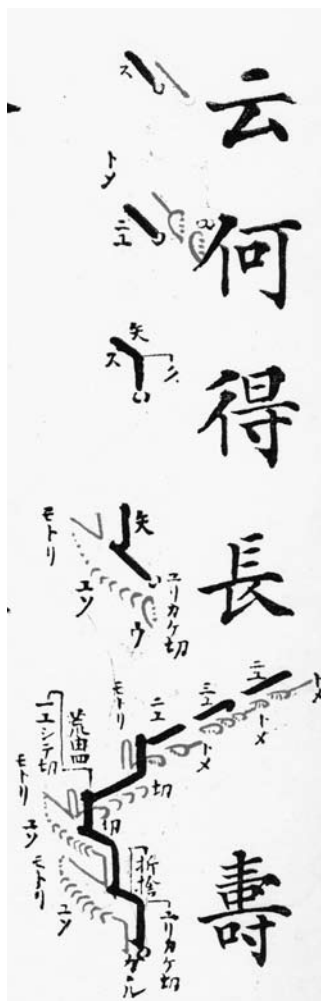
少しも違えずに

そのむかし、中国人はインド声明の受容に
あたり、梵語歌詞を自国語に訳し、旋律も自
国の曲調によって作り直した。しかし日本人
はその中国声明をそのまま受容した。そして
僧侶たちは「全身ヲ直居シ両手ヲ外縛シテ師
ノ面貌ヲ見守リ両耳ヲ正フシテ心ヲ臍輪ニ収
メテ之ヲ聴ク」とのように、師匠が唱える声
明を少しも違えずに聴取・継承すべきものと
して、次代に伝えていった。

声明の旋律は基本的には漢字音の抑揚つ
まり「四声」に準じている。たとえば《云何
唄》の冒頭(写真)では、「云何」は「上声」
だが、「得」は「入声」なので下行する旋律
となる。この原則に立ちつつ歌詞の各フレ
ーズが音楽的に整えられる。また声明では旋律
の骨組みの首、すなわち宮・商・角・徴・羽
の五音が固有の動きをもつとされ、たとえば
最重要音の宮は「麗シクウルベシ」、次に重
要な徴は「ユルベシ」などと規定されている。
実際、《云何唄》の宮と徴(ノ)で示される
の博士(音符のこと)の大半には「ユリ」と
いう装飾音が付されている。

使いわける

声明は師資相承の鉄則のもとに変わらな
くことになる。
変えてはいけない声明の旋律が豊かに変
わってきた背景には仏教にいう「体相用」の



に今日まで伝えられてきたはずなのだが、そ
の旋律は多様に分化発展してきた。《云何
唄》の「ユリ」の場合、真言宗豊山派では
「片由」「由反」「大由」など数種の「ユリ」
を使いわけている。このため博士は単純でも
実際は複雑で長い旋律をもつことが多い。《云
何唄》の第五字「壽」は三種十個の博士で作
られているが、実際の旋律を五線譜で示すと、
一〇〇以上の音符が連なることになる。

遙かなる弁明

日本の声明を育んだ仏教寺院の木造空間は
西洋の石造りの教会に比べ、残響が少なく開
放的であるが、このため自らの声をよく聴く
ことができ、旋律線の微妙な変化を生み出す
ことにもつながった。とりわけ声明の独唱部
分では聴衆には聴き取れないような表現、あ

考え方があろうか。今日のさまざまな
声明から、博士に象徴される声明の本質(体)
は変えていないが、その博士が内在する特性(相)

もし、神やまじい出会ったら

小長谷有紀 民博民族社会研究部

それがないことだからこそ

わたしの友人のひとり、オライート・モ
ンゴル一派トルグートの出身であることを
いかして、自分のふるさとである中国内蒙古
自治区アラシャ盟と、同じくトルグートがす
むモンゴル国アルタイ山麓との両方で、口承
文芸の調査をしている。

口承文芸のなかには、神話や伝説、昔話
など、かたちのさだまった物語のほかにも多様
な内容をふくみうる。何しろ、日本でも少し
前まで「昔話を聞かせてください」と乞うと
若いころのことが話された、というから、ラ
イフヒストリーをふくめてもよいかもしれない。
また、ちょっとしたエピソードも口承で
伝えられている。否むしろ、ささいなことだ
からこそ、わざわざ文字にすることなく、口
承でのみ伝えられる、とみるべきかもしれない。

口にしてはげな

さて、彼女が聞いて集めたたくさん話の

なかに、アルタイ山中で霊的存在に出会った
ときのエピソードがある。ある人は、山の主
に出会ったことを人に話してはいけない、話
すと首がとぶ、と語った。また、ある人は、
土地の神に出会ったにちがいないと思い、家
族にもいえず、二〇年間だまっていた、と語っ
た。また、別の人は、不思議なものに出会い、
こわくて逃げ、ある家にたどり着き、逃げて
きた理由を話すと、それを聞いた老夫婦は、
山の主だったにちがいないと大喜びして、乳
を振りまいて祈りをささげた、と語った。

有難き幸せ

山の主に出会うことは吉兆である。ただし、
その経験を口にしてはいけない。伝達が禁じ
られることよって吉兆は維持される。しか
し、もしそうとは知らずに語るならば、吉兆
は、当事者を越えてもたらされる。めつたに
もれでないことが偶然に表出する。まさに「有
難き」幸せである。物語のありがたさの核心
に触れるような思いがする。



祖先神となったチンギス・ハーンに願いを
とどける儀式

を聴き取り、さまざまな旋律として具現(用)
しているのだ、という僧侶たちの遙かなる弁
明がわたしには聞こえてくる。

いは通常の発声とは異なる音色による表現
など、あらゆる声の表現の可能性が追求され
てきた。また斉唱の場合は原則として同じ音
高で唱えるが、そのつもりで唱えていても僧
侶の声域の問題なのか四度や五度などの音程
差があったり、あるいは敢えて他者と異なる
ピッチで唱えたりすることもあり、それらは
結果的に倍音効果による深い響きを醸し出す

五音博士(本来の博士)と仮譜
(実際に唱える旋律を記述した譜)
《云何唄》冒頭
『南山進流聲明類聚附伽陀』松本日進堂
昭和5年刊(画像は昭和46年9版)より

生存を支えるメッセージ

ボルネオ島内陸部でもに狩猟採集活動をしてきたプナンの人たちは、さまざまな鳥の鳴き声を神からのメッセージとしてとらえてきた。鳥の鳴き声の音声パターンにプナン語をあてて「聞きなし」のである。その多くは獲物や果実の存在にかかわるものである。ムジサイチヨウやキユウカンチヨウ、クロカケスは猪を獲りにいくよう促し、オジロウチワキジやセイランなどは果実の存在や熟成を教えてくれる。その一方、サイチヨウやムジサイチヨウ、ズグロサイチヨウは死や負傷の危険を警告したりもする。彼らの生存を支える食物の確保にかかわる神の声はきわめて重要であった。

都合のいいように

だが、当然ながらこうした神の声は、異なるメッセージのものが同時に重なって、あるいは連続的に聞こえてきたりすることも多い。すべての声を真に受けていては、日常生活が立ち行かなくなってしまう。じつところ、プナンの人たちは聞こえてきた声を、状況に応じて都合のいいように選択して何らかの行動をおこすのである。場合によってはこの選択の決定権を握るのがシャーマンのよう

な有力者だということにもなる。定式化され慣習化された聞きなしだが、同時にそれは何らかの企みをもって操作可能でもある。

そもそも、鳥の鳴き声とそれにあてられるプナン語との結びつきは、なんら必然的なものではない。特定の鳴き声のパターンの旋律輪郭に対して、高い音に

は狭い母音が、低い音には広い母音があてられる傾向は認められるが、そうでない場合も少なくない。また、長い音には単語の最後の音節があてられるという、彼らの即興的な歌の制作原理と共通する規則はかなり明確にあるが、これなどは鳴き声の音響特性とはまったく無関係に、文化的に設定されたものに他ならない。

歌として返す

鳥の鳴き声は、神からのプナン語として聞きなされる時点で、そのプナン語音声を作り出したせる身体運動を暗黙のうちに想起させ



サイチヨウ (撮影・Lip Kee)

コーランの伝承とメディアの変化

西尾哲夫 民博 民族文化研究部

機械をとおして

電子機器の発達によって音声伝達をめぐる状況が激変した今では、パソコンの前に座ってインターネットに接続すればコーラン（クルアン）を聞くことができる。パソコンがなくとも、ラジオやテレビにはコーラン朗誦を流す専門のチャンネルがあるし、コーランの朗誦を録音したカセットやCDが大量にまわっている。イスラーム世界の町かどを歩けばあちこちの店先からラジオやカセットをとおしてコーランの朗誦が響いてくるし、行きかう人の携帯電話からもアザン（礼拝を呼びかける声）やコーランの章句が聞こえてくる。これを着信音にしている人がいるからだ。

肉声でつたえる

だがイスラーム勃興以後つい最近まで、世界中のムスリムはモスクから響いてくるアザンによって一日を刻み、肉声で伝えられるコーランにみちびかれて日々をすごしてきた。もちろん文字テキストとして本の形になったコーランもあるが、本来、コーランとは声に出して読まれ伝えられるものなのであり、初期のころは、文字による記録は音声による口承を補うための備忘録のようなものだと考えられていた。

コーランは正則アラビア語の押韻文で書かれており、正しく発音するための複雑な規則「タジユウイド」が定められている。さらにこれに旋律をつけた「ティラーフ」には七つの流派がある。コーランの読誦術は師から弟子へと口頭で伝えられ、彼らは文字どおり自分の体を使ってコーランを再生してきた。コーランだけではない。ハディース（預言者の言行録）にしても師から弟子へと口頭で伝えられたし、学問においても個人で本の内容を暗記するのではなく、師を訪ねて直接教えを受けるのが正しい学問のあり方とされていた。

耳に届くのは

技術やメディアが発達すると、肉声が届く範囲をこえてコーランが伝えられるようになった。はじめて電話線が引かれたころには、イスラーム法学問答が電話の音声によってどこまで正確に伝えられるのかをめぐる議論があったと聞く。機械をとおした声は、肉声と同じだけのインパクトを人間の感覚に与えることができるのだろうか。

朗誦のカセットやCDが出まわり、携帯からコーランの章句が流れてくる現在でも、イスラーム圏の国々には朗誦家を養成するための機関が置かれている。現代世界にあってもコーランは身の体によって伝えられるものなのだ。



町かどで子どもたちにコーランの伝承をする。トルコ (撮影・大村次郷)



コーラン写本 ペルシア語逐語訳およびアラビア語の注釈つき (図書資料番号 C942369811 中西コレクション)



コーラン写本 18~19世紀 北アフリカ (図書資料番号 C942370815 中西コレクション)



果敢に挑戦 みんぱく若手研究者奨励セミナー

のぶた としひろ
信田 敏宏

民博 研究戦略センター

民博では、国内の若手研究者からの共同利用に関するさまざまな要望、意見を確認するため、2006年度より「国立民族学博物館の共同利用に関する若手研究者懇談会」を開催してきた。そして2009年度からは、「みんぱく若手研究者奨励セミナー」と名称を改め、受講者による研究発表のほか、本館の施設案内などを実施している。

二〇一〇年二月二四日から二六日の三日間、みんぱく若手研究者奨励セミナーが実施された。二回目となる今回のテーマは「国境を越える市民社会と人類学」であった。市民社会によるあらたな「つながり」

こんにち、わたしたちは、日々の暮らしのなかで、あるいは毎日のニュースのなかで、NGOやNPOに代表される市民社会の存在を見聞きするようになってきた。また、ペットボトルのキャップを集めることで、あるいはフェアトレードのコーヒーを買うことで、わたしたちは、世界の人びととの「つながり」を意識するようになってきた。そうした「つながり」は、国家や企業によって仕掛けられた「つながり」とは異なり、市民社会の進展によってもたらされたあらたな「つながり」のように思われる。日本に暮らすわたしたちにとって、市民社会はもはや当たり前存在となりつつあるが、日本に限らず世界各地でも少なからず同じような現象が起きている。例えば、東南アジアでは、ある村に、日本のNGOがやってきて、井戸を掘ったり、学校を建てたり、古着を提供したりしてくれるのは、それほど珍しいことではなくなっている。

市民社会への人類的アプローチ
こうした背景には、NGO・NPOや市

教ネットワークがさまざまな支援活動をおこなっている状況を目にするようになってきているのである。市民社会がグローバル化するなかで生み出されたあらたな現象を人類学(者)は見過ごしてはいないが、こうした現象をどのようにとらえるべきなのかについてはいまだ試行錯誤の段階にある。本セミナーでは、国境を越えてグローバルに展開する市民社会に対して、人類学が可能なアプローチについて検討した。

緊張感ただようセミナー

本セミナーは文化人類学および関連分野の大学院生やPD(ポストドクター)の若手研究者を対象に広く受講生を募り、書類審査をおこなったうえで、受講生を決定



3日間にわたって開催されたみんぱく若手研究者奨励セミナーの様子。須藤健一館長による挨拶の場面

している。本セミナーの特徴は、受講生にテーマに関連した発表をおこなってもらい、そのなかから優秀発表者を選んで表彰するという制度を設けていることである。表彰制度には賛否両論あるが、セミナーの雰囲気を引き締めるうえでは効果的であろう。表彰制度は受講者たちが切磋琢磨し、発表の内容や方法を工夫し、討論にも積極的に参加する仕掛けとして有効であったように思う。

セミナーは、宇田川妙子准教授によって

「イタリヤの『第三セクター』現象——『市民社会』の人類学的考察の試み」、筆者によつて「先住民運動のエスノグラフィ——オラン・アスリのフィールドワークから」と題した教員講演から始まった。その後、一五名の受講者による発表(もち時間四五分)が三日間にわたって続いた。研究の対象としている地域もヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカとさまざま、個々の発表テーマも「市民社会」を正面から論じたものから、音楽や歴史の問題に絡めて論じたものまで、まさに多種多彩であった。

今回、「みんぱく若手セミナー賞」を受賞した二名の発表は、それぞれ、北欧フィンランドにおける福祉の問題を批判的に論じたものと、モンゴルの市民参加型NGOの活動をコミュニティと公共性の観点から論じたものであった。総合討論では、「市民



2008年9月、マレーシアの首都クアラ・ Lumpur でおこなわれた先住民NGOによるデモ行進。デモは警察の介入によって中断した。「NO JUSTICE NO FUTURE」と書かれたプラカードが印象的

民運動、さらには宗教ネットワークなどで構成される市民社会とそのネットワークが、東西冷戦終結後、グローバル化の波とともに国境を越え、地球規模で展開するようになったことが関係している。二一世紀に入ると、市民社会のグローバルな展開はさらに広がりを見せ、文化人類学や民族学が研究対象とする周辺地域にまでその影響がおよんできている。その結果、こんにちの人類学者は、フィールドの傍らでNGOや宗

先端的テーマに挑戦する場として

文化人類学の分野では時代の先端をいくテーマであったこともあり、まだまだ議論が未熟な部分も感じられたが、受講者たちはそれぞれにこの難しいテーマに果敢に挑戦していたように思う。市民社会がこれからはますます活発化していくなか、今回のセミナーを契機にあらたな研究プロジェクトとして今後も議論を深めていく必要性を感じた。本セミナーが若手研究者にとって今後の研究に生かしていくための議論の場となることを願い、今年も引き続き実施する予定である。

みんぱく若手研究者奨励セミナー
「国境を越える市民社会と人類学」
2010年11月24日〜26日
《優秀発表者》
・高橋 絵里香(民博 外来研究員/日本学術振興会特別研究員(PD))
「在宅」の思想——フィンランド西南部の地域福祉にみる「社会」の重要性について
・西垣 有(大阪大学大学院博士後期課程)
「コミュニティと公共性」——モンゴルにおける市民参加型NGOの活動から

特別展

「ウメサオタダオ展」

みんぱく初代館長・梅棹忠夫の軌跡をたどり未来をみつめる特別企画展

日本のどのような問題も、日本だけでは解決できない、そんな現代だからこそ、世界への知的好奇心は欠かせません。世界中にあるさまざまな感動を記録した、梅棹忠夫の生涯を、みんぱくで「探検」してください。そして、世界へのあくなき好奇心をお持ち帰りください。

会期 6月14日(火)まで
会場 特別展示館

◆関連イベント

◆企画展

「民族学者 梅棹忠夫の眼」

梅棹忠夫が、世界各地で自身が撮影した写真のなかから自ら46点を選び、国内各地で開催した写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を再現します。

会期 6月14日(火)まで
会場 本館展示場内

みんぱくセミナー

会場 国立民族学博物館講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第395回 4月16日(土)

【特別展「ウメサオタダオ展」関連】
霊長類学からみたウメサオタダオの文明論
講師 山極寿一(京都大学教授)



梅棹忠夫の名著『文明の生態史観』は、現在の先史学や霊長類学の発見と照らし合わせてみても、その輝きは失われていません。人間共同体の歴史を生活様式の変化と生態学・遷移概念を用いてそこに段階的な法則を見出すとしたところが新しい発想でした。それを、人類の進化と自然に学ぶ市民力の歴史としてとらえ直してみます。

第396回 5月21日(土)

【特別展「ウメサオタダオ展」関連】
青年ウメサオタダオの学問形成
講師 中生勝美(桜美林大学教授)

聞き手 小長谷有紀(国立民族学博物館教授)



終戦間際の張家口に、伝説の研究所と呼ばれた西北研究所がありました。この研究所の半分以上の所員が著名な人類学・生態学の学者となりました。今回の発表で、若き日のウメサオタダオが、ポナペ、大興安嶺、冬のモンゴル草原縦走を通じて、どのように学問形成をしたのか、1998年にインタビューしたビデオテープの証言を元に発表します。

◆研究公演
「心に草原を——馬頭琴がひらく、新たな世界」

みんぱく初代館長の梅棹忠夫が、本格的な人類学研究を開始したのが、中国内モンゴル。生前最後に訪問した国もモンゴル国でした。今回の公演では、モンゴルの馬頭琴奏者A.バトエルネネ氏のほか、総勢9人による演奏を通して、地方に伝わる擦弦楽器との違いや民族音楽の移り変わりを紹介します。

実施日 5月5日(木・祝)
時間 13時30分～16時15分(開場13時)
場所 講堂
定員 450名
※参加無料、要申込
申込締切 4月21日(木) 必着
申込方法

往復はがきに住所・氏名(返信用宛名にも)・年齢・電話番号・参加人数(本人を含め4人まで)、「国立民族学博物館友の会」会員番号(会員のみ。維持会員および正会員の方は優遇枠があります。)<「5月5日研究公演」と書いて広報企画室企画連携係までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。

お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 06・6878・8210

◆みんぱくセミナー

詳細は13ページをご覧ください。

◆みんぱくウィークエンド・サロン

みんぱく名誉教授が梅棹先生の人格や研究についてお話しします。詳細は24ページをご覧ください。

オセアニア展示・アメリカ展示があたりしくなりました

あたりしく生まれ変わったオセアニア・アメリカ展示場にぜひ足をお運びください。

みんぱく春の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。生まれ変わったオセアニア・アメリカ展示についても研究者が展示場で説明します。

実施日 4月5日(火)
4月7日(木)
4月8日(金)

刊行物紹介

■平井京之介 著
『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』



NTT出版 定価:2,415円
タイの農村女性は、いかにして工場に適応し、生活はどう変わったのか? 経済人類学の新たな地平を拓く日系工場のエスノグラフィ。従来の「女工哀史」という見方ではとらえられない、生き生きとした姿が描かれる。

■川口幸也 著
『アフリカの同時代美術——複数の「かたり」の共存は可能か』



明石書店 定価:4,410円
アフリカの同時代美術という分野で、20世紀のアフリカが出版や展覧会を通してどのように語られてきたかを検証し、21世紀における新しいアートと文化の語り方の可能性を模索する。

■『民博通信』2010 No.131

評論・展望
他者の幻想、自己の内観
——驚異譚をめぐる比較研究
山中由里子

■Bon bryga dge legs lhum grub rgya mtsho/
Shin'ichi Tsumagari/Masashi Tachikawa/
Yasuhiko Nagano
『Bonpo Tangkas from Rebkong
(Bon Studies 13)』

国立民族学博物館調査報告 No.95

時間 14時～17時
場所 第5セミナー室ほか
申込方法
みんぱくホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お問い合わせ
広報企画室広報係
電話 06・6878・8560

●無料観覧日のお知らせ

5月5日(木・祝) のこの日は、特別展、企画展、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。

みんぱくラジオ「世界を語る」
みんぱくの研究者のお話をラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪(1314kHz)
毎週水曜日 23時30分から24時

*詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。
*お問い合わせの受付時間は9時から17時(土・日・祝日を除く)です。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)
第395回 5月7日(土) 14時～15時
【特別展「ウメサオタダオ展」関連】
梅棹忠夫の人となり
講師 石毛直道(国立民族学博物館名誉教授)

第396回 6月4日(土) 14時～15時
【特別展「ウメサオタダオ展」関連】
梅棹忠夫と民族誌写真
講師 吉田憲司(国立民族学博物館教授)

日本写真家協会会員でもあった梅棹忠夫先生は、民族学調査での写真の活用について独自の見識のもと、世界各地で、その地に暮らす人びとの姿をカメラに収めました。「梅棹忠夫写真コレクション」は民博に寄贈され、現在その整理や情報化作業をすすめています。企画展「民族学者・梅棹忠夫の眼」の開催にあわせ、梅棹先生がカメラ・レンズを通じて眼を凝らすようにした世界を改めて見つめ直します。

東京講演会
会場 東京都中小企業会館講堂(銀座)
定員 130名(要申込)

第97回 4月30日(土) 14時～15時
【特別展「ウメサオタダオ展」関連】
梅棹忠夫の人となり
講師 石毛直道(国立民族学博物館名誉教授)

第98回 6月26日(日) 14時～15時
梅棹忠夫先生の学問世界
講師 松原正毅(坂の上の雲ミュージアム館長、国立民族学博物館名誉教授)

梅棹忠夫先生は、「幻視の行為者」としての人生をあゆまれました。そのあゆみは、みごとくいつかよいものです。梅棹先生の学問世界をささえていた三つの要素は、持続力、越境力、発見力だともっています。今回の講演会では、この三つの要素を中心にお話したいと考えています。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
[World Wide Bazaar]
http://www.senri-f.or.jp/shop/

特別展「ウメサオタダオ展」解説書

三月一〇日より始まった特別展「ウメサオタダオ展」の解説書をご案内します。
国立民族学博物館(みんぱく) 初代館長、梅棹忠夫の九〇年の全生涯とその知的営みにせまる、渾身の力作です。総勢四二名にのぼる執筆陣がそれぞれ異なる視点から解題をこころみえています。
今回の特別展をご覧になる前に、是非お読みいただきたい一冊です。

特別展解説書
梅棹忠夫
——知的先覚者の軌跡

編集: 特別展「ウメサオ タダオ展」実行委員会
責任編集: 小長谷有紀
発行: 財団法人千里文化財団

A4判・146頁
定価:1,890円(税込)
(友の会価格 1,701円)



大エジプト博物館保存修復センター

ひだか しんご
日高 真吾 民博 文化資源研究センター

大エジプト博物館保存修復センターの外観



大エジプト博物館に収蔵予定の太陽の船

膨大な文化財を二回

エジプトでは、二〇二二年の開館を目指して大エジプト博物館の建設が進んでいる。建設場所は、ギザのピラミッドの目の前であり、有名なツタンカーメンのマスクや太陽の船をはじめ、エジプト国内に散在している膨大な文化財を収蔵、展示する大規模な博物館となる。わが国は、国際協力機構（JICA）から三四八億円をエジプトに貸付し、資金協力をおこなうとともに、大エジプト博物館の付属施設となる大エジプト博物館保存修復センターに専門家を派遣し、文化財保存の技術支援を実施している。ここでは、わたしが文化財保存の専門家として派遣された、大エ

ジプト博物館保存修復センターについて紹介したい。

若手研究者とのワークショップ

大エジプト博物館保存修復センターは、二〇一〇年六月に開館し、現在、エジプト国内の文化財が暫時、搬入されている。おもだった活動は、搬入された文化財を収蔵庫に配架していくことと、破損や劣化の進んだものについて適切な保存修復をおこなうことである。また、文化財管理を適切におこなうためのデータベースの構築、虫害対策のための殺虫処理、保存修復に必要な情報となる科学分析もおこなわれている。スタッフの大半は二〇代から三〇代と若く、保存科学の知識は有しているものの、実践経験の少ない若手の研究者である。わたしがおこなったワークショップのおもな内容は、中性紙の厚紙やクッション材を利用し、文化財の大きさや形状に応じた収納箱を製作するというものであった。参加者は、収蔵庫管理室、石質文化財保存修復室、木質文化財保存修復室、有機物文化財保存修復室、無機物文化財保存修復



保存修復ラボの様子 若手の研究者が日々技術を磨いている

室、ミイラ保存修復室の部屋から選出された二五名の若手研究者であった。

民博の収蔵方法が二役買う

ワークショップは、参加者が積極的に参加してくれ、熱のこもったものとなった。また、後のアンケートでも好評だったことから、民博の収蔵方法がエジプトにおいても大いに参考になるものであったのだろうと考える。

エジプト文明には多くの日本人が関心を寄せる。しかし、現在のエジプトは政局が不安定。早く落ち着きを取り戻し、日本との文化財交流が再開されることを願う。

みまぐ 私の逸品 復活祭装飾用卵

ルーマニアでのイースター（復活祭）は、木々の若芽が息吹く直前の肌寒いころに迎える。モルドバ地方を含めルーマニアには、世界遺産を含めてたくさん教会や修道院がある。標本資料とされたイースターエッグは、そのひとつの修道院で作られた。

卵はもともと生命とその再生をあらわす標章として広く用いられる。キリスト教会、コプト教会、モスクなどでは、ダチョウの卵など大型の卵を創造や再生の象徴とみなし、建物内部につりさげる。また習俗としてイースターに卵を食べるのは、^{オーストリア}過越しの祭に復活と来世を示す卵を食べたユダヤ教からキリスト教に伝えられたものである。

したがってイースターに卵を用意するのは、キリスト教圏なら世界のどこでもみられる行事である。しかし、ルーマニアのイースターエッグはひと味違う。色がひととき鮮やかで多彩なのだ。この色彩感覚はなにに基づいているのだろうか。村々で伝えられる若い女性の伝統衣装は、白いスカートとブラウス、鮮やかな巻きスカートとベストからなる。今では村でもめつたに見られないが、華やかな衣装を身にまとった娘たちには、男性なら誰しも心ときめくに違いない。イースターは、十字架上で死んだイエスの復活を祝うキリスト教でもっとも大切な行事のひとつである。その卵からの連想で若い娘たちを思い出すのは不謹慎かもしれないが、春、イースターが終われば聖ゲオルゲの祭日があり、若い男女が水をかけ合って戯れ、羊たちは舎飼いされている村から夏の放牧地へと出発する。季節は緑と花々で彩られ、耕作がはじまる。生命が躍動する季節である。

イエスは復活された。確かに復活された。と村々で人びとはイースターの挨拶を交わす。イエスが復活したというキリスト教の核心は、われわれ異教徒には理解しがたい。しかし、その復活の喜びを季節がもたらす生命の再生として人びととともに経験できるのが、豊かな自然に恵まれたルーマニアの村々なのだ。



標本番号 H0212186 他
地域 ルーマニア
受入年 1998年

民博 民族文化研究部

新免 光比呂

台湾で、ラフ人をたずねて

にしもと よういち
西本陽一
金沢大学准教授

北タイの山地少数民族ラフ人の村落で、研究をしてきた筆者が、台湾を訪問することになった。この機会にラフ人を探してみようと思いついた。そこは意外な出会いに満ちていた。

雲南、ミャンマーから台湾へ

ラフ人は中国の雲南省西南部からミャンマーのシャン州東部、タイ北部にかけて多く住んでいる。台湾にも少数だがラフ人がいることは、本で知った。たしかに、北タイで、あるラフ人を訪ねたとき、主人が台湾にいる親戚と電話で話していたことがある。一九四九年、中国での国共内戦に敗れた国民党軍の残党は、のちにミャンマーに逃れ、共産党政権への反攻を試みたが失敗して、台湾に逃れた。彼らのなかには、雲南やミャンマーの少数民族もふくまれていた。

ガイドブックで、かつて雲南で戦った人びとが住む「博望新村」のことを知った。博望新村にラフ人がいるかどうかかわからないが、雲南の雰囲気をもつことを売りに観光化している。二〇〇七年には馬英九総統が慰問に訪れている。じつは、その地域に多い「新村」は、どれも国民党軍の元兵士と家族たちの移住村だ。

村の門を入ると、民宿やレストランが並ぶ。「水擺夷」とか「西双版纳」とか「滇緬」など雲南に因む文字が並んでいる。資料館には「異域を歩いて五〇年」という展示の看板もある。「異域」とは、アナンディ・ラウ主演で、ミャンマーを拠点にゲリラ戦をしていた国民党軍残党を描いた映画のタイトルだ。村の短い「メインストリート」に店が並び、お土産品や食品が並べられていた。元兵士の家族が暮らしていた長屋が、そのまま観光客相手の店や宿にかわったようだった。漬け物や売っている女性に、下手な中国語でためしに話しかけてみた。

「ここにラフ人はいますか？」
「わたしの父はラフ人だったけど」と、Sというその女性は答えたが、ラフ語を話すことはできず、逆にわたしに「ラフ語ってどんなの？ 喋ってみて。聞いてみたいから」といった。亡くなった彼女の父親は、雲南とミャンマーで戦った元兵士だった。何もなかった周囲の山を苦勞して開墾して耕して村を開いた。母親は雲南出身のワ人で、Sさん自身はこの村の生まれだった。

雲南の土司一族から台湾の国民的スター誕生

わたしはSさんの店で麵をこちそうになりながら、話をした。S姓の一族はもと清朝時代の地方領主「土司」の家系だったという。「ラフのことを知りたければ叔公（父方の祖父の弟）に聞けばいい、今度『雲起雲落』という回顧録も出すそうだから」と彼女はいった。

「叔公には娘が四人いて、長女はS安妃というのよ。ドラマの『星星知我心』で演じていた子よ」
後で三〇歳代の台湾人から聞いた話では、『星星知我心』は国中の子どもが毎日見て泣いていたというほどの人気ドラマだった。また、これも後日談だが、わたしは台北にその叔公を訪ねた。彼の祖先は、もともと清朝時代に雲南のラフ族地域に入植した漢族だといった。彼自身はラフ語を話せなかった。ラフ人土司の子孫として本を書いたが、自分がラフ人だという意識もないようだった。

傣族も、ラフ人も、タイ人も

Sさんの店を出た。外は暗くなっていた。Sさんは向かいの家の人にも、お母さんが何族か聞いてくれた。傣族だった。「わたしたちは一緒に暮らしているけれど、誰が何族かは知らないのよ」とSさんはいった。

また、ある雑貨店の年配女性も傣族だった。Sさんは、傣語は自分では話せないけれども、聞くのはわかるそうだ。博望新村には傣族が一番多いのである。さらに別の民宿では、ワ人のおばあさんにも会った。民宿は増築中で、日本語の建築材のカタログの説明を頼まれた。お嫁さんたちの会話は雲南方言だった。

次の日は、別の「新村」に行った。路地にテーブルを並べて、昼間から宴会をしている女性たちがいて、ひとりが傣族だった。ラフ人もそこにいたので、宴会に加わり、二時間ほどラフ語でお喋りした。

自称五〇歳のラフ人女性の素性は、何度聞いてもよくわからなかった。元兵士の家族でもなく、雲南の西双版纳の出身で、雲南と台湾とを何か月かずつ行ったり来たりしているという。「金を稼ぐには台湾がいい」そうだ。

タイ人もその近所に住んでいた。六〇過ぎの女性だ。東北タイの出身で、タイの領事館で働いている。中国からやって来た今の夫と知り合い、一緒に移住してきたという。きれいな標準タイ語を話していた。ラフ人をたずねて行った。そこにラフ人がいた。だがラフ人たちは、自分がラフ人かどうかなど気にしていないようだった。いろんな民族的な素性の人があったが、誰もそれを問題にしていなかった。気にしていたのは、よそ者だけだった。



屋から宴会をしていた某新村の人たち。
手前はラフ人で、奥のめがねをかけた女性はタイ人



博望新村のメインストリート



資料館展示の看板
「異域を歩いて50年」



屋から宴会をしていた某新村の人たち。
右手は傣人



開村当時の写真を使った博望新村の看板。
博望新村は雪が見られる観光地、合歡山へと到る省道沿いにある

日本社会に潜む「無意識下の排他意識や言動」
「今日、相談に来て本当に良かったです。初めていい日本人に会えました」

外国人専門家相談会に訪れたある中国人留学生在が、帰りに語学ボランティアに残っていたことばである。相談の内容は、交通事故に遭って入院したが、医療過誤があったのでその病院を訴えたい、というものであった。通訳ボランティアの話では、入院した病院で「ここは日本人のための病院だ」といわれたことが、医療過誤を疑った原因らしい。外国人相談の現場にかかわっていると、じつは日本社会に潜むこのような「無意識下の排他意識や言動」の方が問題ではないかと感じる人が多い。

東京では、公共施設を年間二〇回程度巡回する外国人のための「都内リレー専門家相談会」がおこなわれている。二〇〇二年に始まった活動だが、その一年目にも「無意識下の排他意識や言動」が外国人住民に重くのしかかっていることが垣間見える事例に出くわした。ある会場に、九州から飛行機で来たという女性が訪れた。さすがにそのときは「九州にも専門家の相談を受けられるところはありませんよ」と声をかけたのだが、「近所の人に知られたら、わたしはその地域に暮らせなくなります」という答えが返ってきた。

多言語化・複雑化する問題に対応

「都内リレー専門家相談会」

東京は全国でもっとも外国人登録者数が多く、その国籍は一八〇カ国におよぶ。また、交通機関の発達によって相談者は行政区を越えて遠方からのあいだで、賃金不払いや不当解雇、離婚や在留資格など複雑な問題が生じつつあった。そんななか、外国人支援にかかわる市民ボランティアの提案によって、いくつかの外国人支援団体と弁護士や労働相談員などの専門家、そして中国語・英語・スペイン語の三言語の語学ボランティアが待機して二日間にわたって「無料総合相談会」が試行的に実施された。

ところが、来場した相談者はわずか数人。相談会終了直後におこなった「フィードバックミーティング」では、日本人の語学ボランティアから「相談者がこんなに少ないなら、相談会は必要ないのではないか」、「こんなに長時間待機させられて時間が無駄になった。運営の仕方が悪い」等の厳しい指摘がなされ、企画運営に当たっていたメンバーは返すことがなかった。そんなときである。元留学生の語学ボランティアが手を挙げてこういった。「僕は今、会社員として働いているが、留学生のときは困ったことがあってもどこに相談していいかわからなかった。今日参加してこんな相談会があったらどんなによかったかと思つたし、僕たち外国人のことをこんなに真剣に考えてくれている日本人がいることを知って本当にうれしかった。悩みを抱えている人はたくさんいる。相談会のこと知られていけば、必ず相談にやってくる。だから、どんなに相談者が少なかったとしても、どうか今後も続けてほしい。お願いします」会場から思わず拍手が起こった。参加したメンバー間に専門家相談会の必要性和意義が共有され、活動を継続していこうとの決意が固まった瞬間だった。

多文化を
ささえる
人びと

外国人のための専門家相談会 東京外国人支援ネットワーク

外国人住民の増加に連れ、ますます多言語化している東京。

社会生活において、彼らのかかえる悩みや問題も複雑化している。

組織・分野を越えた連携・協働が重要だという認識が高まるなか、

多くの課題を乗り越えながらも、さまざまな団体による外国人のための相談会が実現した。

すぎさわ みちこ
杉澤 経子

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター プロジェクトコーディネーター

もやって来る。外国人のかかえる相談内容も複雑化し、しかも多言語化してきている。もはや一団体、一自治体で外国人住民の問題に対応するのは人材面でも財政面でもほとんど不可能な状況である。このような事情を背景として、多様な組織・団体・人びとが分野を越えて連携・協働することの重要性への認識が高まり、自治体、国際交流協会、NPO、弁護士会等の専門団体、大学など約四〇団体で組織する「東京外国人支援ネットワーク」が発足し、都内リレー専門家相談会が実現した。また、在住外国人の参加により、多言語で多分野の専門家のアドバイスを正確に伝えることができるようになった。こうした体制に至るまでにはさまざまな乗り越えなければならぬ課題があった。行政が縦割りを越えて連携すること、多分野の専門家が分野横断的に協働すること、多くの市民が語学ボランティアとして参加しておこなう相談体制をつくることなどである。専門分野が異なれば同じ問題でも視点が異なり、また行政と市民団体では組織運営の方法も異なってくる。日本人同士でもさまざまな摩擦や軋轢が生じるのである。多様な組織・人びとが協働するためには、活動にかかわる人びとの問題認識や志を共有することが重要だが、それがなかなか難しい。

こうした協働型の専門家相談会の源流は、九七年に武蔵野市でおこなわれた「無料総合相談会」にさかのぼって見ることができる。

専門家相談会を生み出した外国人当事者の声

九〇年代後半には武蔵野市周辺に暮らす外国人

自分たちの問題として

冒頭の医療過誤の事例では、語学ボランティアが留学生の「痛み」を自分のこととして受け止めたからこそ「いい日本人に会えた」ということばで留学生は感謝の意をあらわしたのだと思うが、言語・文化の異なりによって起こる問題は、じつは外国人が置かれている状況に対するホスト住民側のわたしたちの無認識・無理解が原因であることが多いのではないかと考えさせられる。外国人の問題はわたしたち自身の問題でもあることに多くの市民が気づいていくことが重要なのではないだろうか。そのためには、市民自身が外国人相談のような現場の活動に参加し、問題解決の活動にさらに多くの市民が参加していける場や仕組みづくりが重要なのだと思う。

外国人のための専門家相談会受付 (提供・CINGA)



専門家が相談に対応、外国人も通訳ボランティアとして参加 (提供・MIA)



相談の内容を聞きとる語学ボランティア (提供・CINGA)

相談を聞き取った語学ボランティアがコーディネータに内容を伝え専門家をマッチング (提供・MIA)



相談会終了後におこなっているフィードバックミーティング (提供・CINGA)

※CINGA・・・特定非営利活動法人 国際活動市民中心
※MIA・・・公益財団法人 武蔵野市国際交流協会

アマゾン川上流の 聖週間

イエスの像が町中をめくり、住民たちはヤシの葉をもって迎える。カトリックの重要行事聖週間の始まりだ。スペイン統治時代、修道士が伝えたこの儀式を、世俗化など社会変化が進む現在の南米で、人びとほどのようにとらえているのだろうか。

聖週間とは

聖週間という行事のことは知っている日本人はおそらく多くないだろう。キリスト教の信者なら、イエスの受難を記念するこの重要な行事について、ひととおりの知識をもってはいるはずである。しかし、聖週間が伝統行事でも公式行事でもないわが国では、信者以外の人の知識は限られているにちがいない。あるいは復活祭なら、多くの人が耳にしたことがあるだろうが、イースターエッグ探しは春の訪れを祝うヨーロッパ古来の慣行に由来しており、キリスト教の典礼ではない。

聖週間とは四旬節の最後の週、棕櫚の日曜日から聖土曜日までの一週間を指しており、この間、地上におけるイエスの生涯の最後の出来事を記念する一連の儀式がおこなわれる。西暦上の日づけは毎年変わるが、三月か四月におこなわれるのが常である。聖土曜日の翌日の復活祭は、厳密には聖週間の一部ではないが、一連の儀式の締めくくりという意味をもつ。

聖週間のおもな儀式は、福音書の記述に基づくイエスの受難の演劇的再現というかたちをとる。式次第は時代や地域によりさまざまなので、以下では、わたしが一九九五年、南米ボリビア・アマゾンのモホス地方で実見した行事を紹介したい。

受難の演出

スペイン統治時代、イエズス会の管轄下にあったモホス地方には、カトリックの信仰実践が深く根づいている。聖週間は、クリスマスと守護聖人祭とともに、もっとも重要な年中行事である。聖週間の準備は四旬節から始まる。イエスの荒野での四〇日間の断食を記念する四旬節は、回心と償いの期間である。とりわけ毎週金曜日、「十字架の道行き」という信心業がおこなわれる。聖堂のなかや町中に掲げられた受難の場面をあらわす四枚の絵をひとつひとつめくりながら、黙想し、祈りを唱えるのである。

聖週間の本番は棕櫚の日曜日から容易に棺に収まる。復活祭の明け方には、復活したイエスと聖母との再会を記念して、邂逅の礼拝行進がおこなわれる。イエス像と聖母像を輿に乗せ、互いに反対方向で広場をまわり、両者を対面させるのである。

感覚的宣教

モホス地方に見られるような聖週間の儀式は、かつてはカトリック圏ならどこでもおこなわれていた。南米へのキリスト教の伝道は、一六世紀初めのスペインによる植民地化を契機としていたが、その原動力となったカトリックの修道士は、視覚的・演劇的な仕掛けを積極的に活用した。修道士たちは、南米の先住民は知性の働きの十分ではなく、感覚により把握できる以上の事柄を理解できない、と考えていた。そのため、理詰めで教義を説くよりも、絵画や彫刻、音楽により視覚や聴覚に訴えるやり方を好んだ。修道士たちはこの方法を、「目に見える奥義を通じて、彼ら（先住民）の心に篤き信仰の恵みが伝わる」とか、「目から入るものが、神が内側から魂に伝えるものを活気づける」などと表現している。

聖と俗

今日、モホス地方ほど熱心に聖週

間の儀式がおこなわれるところは、南米でも多くない。世俗化の流れやプロテスタント諸派の興隆、信仰実践を支えてきた共同体組織の衰退などにより、大仰なカトリックの儀式は消滅するか、さもなければ観光や芸能に変貌しつつある。聖週間に關していえば、熱心な信者以外の人にとっては、いまや日本のゴールデンウィークにも似た大型連休の様相を呈しつつある。都市住民のあいだでは、会社や学校が休みになり、バカンスに出かける者も少なくない。

このような理由で、聖週間とその後には、宿や交通機関が混雑する。以前、聖週間直前にボリビアを旅したとき、ホテルが満室だったり、飛行機のチケットがとれなかったりして、ずいぶん苦労させられた。都市部では、バカンスにもなう民族大移動の熱気が満ちており、その熱にあてられ、やや憔悴してモホス地方に辿り着いたことを覚えている。雨季の終わりの暑苦しい夜、ホテルの二階のベランダでくつろいでいると、静寂のなか、人びとの足音が聞こえる。見下ろすと、十字架を掲げた礼拝行進がとおり過ぎるところだった。来るべき聖週間に向けて、心の準備をしているのだろうか。おおよそ信仰心のないわたしが、このときばかりは、修道士のいう「篤き信仰の恵み」が少しだけ伝わった気がした。



棕櫚の日曜日の礼拝行進。聖水で祝福されたヤシの葉から十字架が作られ、1年間家に飾られる(1995年撮影)

まずは心と身体を解きほぐす

うえば ようこ
上羽陽子
民博文化資源研究センター

ワークショップは突然始まった。というよりは、始めるとの合図も講師からの挨拶もなく、参加者はそれぞれ見様見真似で、与えられた布に下書きを描き始めた。二〇一〇年二月、インド西部で「RGB2010」に参加したときのことであった。

デザイン系大学生による交流イベント

「RGB2010」は、一九六一年に設立されたインド初の国立デザイン大学（NID）の学生主催によるイベントだ。インド国内一七のデザイン系大学の学生約一四〇〇名がNIDに集まり、三日間かけて自分たちの作品展示やデザ



NIDの学生スタッフ。背後には手作りの三原色による旗がみえる

イン・コンペティション、ファッションショー、職人を招いてのワークショップなどがおこなわれる交流行事である。イベントタイトル「RGB2010」は、加法混色の三原色である赤（RED）、緑（GREEN）、青（BLUE）の頭文字からとっている。テレビやディスプレイは、この三原色「RGB」を混色することで、あらゆる種類の色が生み出せることから、このタイトルを選んだという。イベントを支援するスポンサーとの交渉、会場設営、ワークショップ講師の選定や交渉まですべてを学生が取り仕切っていた。

染色技術カラムカリを題材に

NIDの所在地であるインド西部グジャラート州において、デザイン系大学生の制作技術や思考性に関する調査をおこなっていた筆者は、このイベントに参加した。冒頭のワークショップは、カラムカリとよばれる手描き染色布の制作技法を三日にわたり学ぶコースであった。カラムペン・筆、カリペン仕事・働きを意味する。ワークショップは、削って先を尖らした竹ペン



伝統的文様に自身のアレンジを加えて描いている参加学生

を用いて、後に染料と反応する媒染剤をペン先につけ、フリーハンドで伝統的文様、もしくはそこからアレンジをした文様を描き、その後、染色をして一枚の布を完成させるものであった。しかし筆者の目的は、この染色技法を学ぶことではなかった。実際に日本でものづくり

ワークショップの企画に従事している筆者は、どのようにワークショップを進行させ、対象となっている制作技術の勘所を参加者にいかに伝えることができるか、といったことを実践的に研究している。そのため、講師は事前準備や解説、技術指導をどのような形式でおこない、参加者は何を期待して、どう学ぶかといった点を観察するために参加したのであった。そしてそれらを自身のワークショップに応用できないかと必死になって精察したのであった。

説明をしないということ

ところが、期待は見事に裏切られた。ワークショップでは、参加者各自に布と竹ペンが渡



ワークショップで。集中して講師の手先を観察する参加学生

され、とりあえず、輪郭線となる黒色はこの液をつけて描けば良いとだけ伝えられた。参加者は、見本となるすでに染色された布を眺めながら、それ以上の説明をうけることもなく、ただ黙々と手を動かすだけであった。参加者はデザイン系の大学生ということもあって、臆することもなく、文様を模写するものもいれば、そこにアレンジを加えて描くものもあり、とまどっている様子はなかった。

小一時間たったころ、ようやく講師である職人Jさんが、自己紹介をし、染色技法とその背景について説明を始めた。参加者は、話しに聞き入りながら活発に質問をし、丁寧に手控えをとっていた。このとき、筆者は不思議な感覚に襲われた。なぜかこのときには、すでに参加者と講師のあいだに一体感が生まれていたのであった。こういった講習会などに参加した場合、初めて会う講師や見知らぬ参加者といった慣れない環境に自然と緊張していることがある。ようやく張りつめていた心と身体がほぐれたころに、講習が終わってしまったという経験をしたことがある人も少なくないだろう。

吸収しやすい心と身体

筆者は、だからだと始まったこのワークショップでは、あまり得ることがないのである。といった認識が誤っていることに気がついた。導入部分を振り返ってみると、確かに講師は、各自の質問に対しても丁寧な返答をすることはなく無愛想な印象さえ受けた。しかし、参加者が



カラムカリによる女神儀礼用染色布の制作

作業している竹ペンを取りあげ、無言で自身の竹ペンの動きを観察するように促していた。そして参加者はじつと講師の手先を見つめる。ここでは、発話に頼らない教授法が成立していた。限られた時間のなかで、ワークショップを構成するといった企画・講師側が前のめりになり、過剰な発話・解説をおこなっていることがある。今回のワークショップでは、導入部分での解説を極端に制限し、発話に頼らない教授法を経ることによって、両者の距離がぐっと縮まっていた。同時にお互いの緊張もほぐれ、その後の講師のことばや技術が吸収しやすい状態になったといえる。改めて自身のワークショップを客観的に振り返る良い機会となった。

4月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

※特別展開催中のウィークエンド・サロンでは13回にわたりみんなくの名誉教授が初代館長・梅棹忠夫についてお話しします。

3日
(11日)

話者：藤井知昭（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

アフガニスタンのフィールドワーク回想
—梅棹先生との出会いの思い出とともに—

場所：特別展示館

10日
(18日)

話者：端信行（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

文化行政から文化政策へ
—ウメサオタダオ展にちなんで—

場所：特別展示館

17日
(25日)

話者：杉本尚次（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

民博の日本民家展示（模型）と梅棹先生

場所：本館展示場

24日
(11日)

話者：和田正平（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

『サバナナの記録』（梅棹忠夫 1965）のフィールドから
本格化した日本のアフリカ研究

場所：特別展示館

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

東北地方太平洋沖地震で被災された皆さまへ

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により被災された皆様にご心よりお見舞い申し上げます。また、被災地救援に全力を尽くされている関係者の方々に深く感謝申し上げます。被災者の方々がこれからの生活に希望の持てる適切な支援を早急に行われることを期待します。

この未曾有の災害に対し、国立民族学博物館として可能な限りの協力・支援を行うよう努めてまいります。

(国立民族学博物館長 須藤健一)

編集後記

津波で壊滅した街や生活の映像にこぼをうしなう。本誌をお読みいただけるかどうか分からない読者の方々も多い。犠牲になられた方々のご遺族の皆様、被災された方々、なかでも弱い立場の方々に、お悔やみとお見舞いを慎んで申し上げます。

今、何ができるのか、今後どうすべきか、わたしも含め、幸運なことに被災を免れた人びとが、それぞれに考え行動に結びつけたい。想定外ということばが使われなくなる日が来ることを願って。(久保正敏)

●表紙：「人の群れ方、三々五々」（大阪城にて、撮影・土田ヒロミ）

次号の予告

特集

あたりしくなったアメリカ展示（仮）

月刊みんなく 2011年4月号

第35巻第4号通巻第403号 2011年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫
編集委員 久保正敏（編集長） 朝倉敏夫 櫻元真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一孝

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

